

4 マレーシア

イスラムと日常着

鳥居 高

都市部の日常着

今、マレーシアの都市の街角で、人々の服装を見渡すとまず最初に目に飛び込んでくるのがマレー人、中でも女性たちの華やかな衣装である。これはマレー人の人口が総人口の五五%を占める「数」にも関係するのだろうが、それ以上に、「伝統の継承」という点において他の住民と際違った差を見せていることによる。もちろん他の住民にも彼ら特有の日常着が受け継がれている。特にインド系の住民である。例えば、女性のサリ―姿はマレーシアでも容易に目にする。また、男性の中にはドォティ(Dhoti)後述するマレー人のカイン・プレカット(Kain Pelekat)のような服)、ジッパ(Jippa)裾が膝まである大型のTシャツのような服)と呼ばれる一組の衣装を着る人もいる。このジッパは女性もまた利用し、ズボンやスパッツとともに軽快に街を動いている。

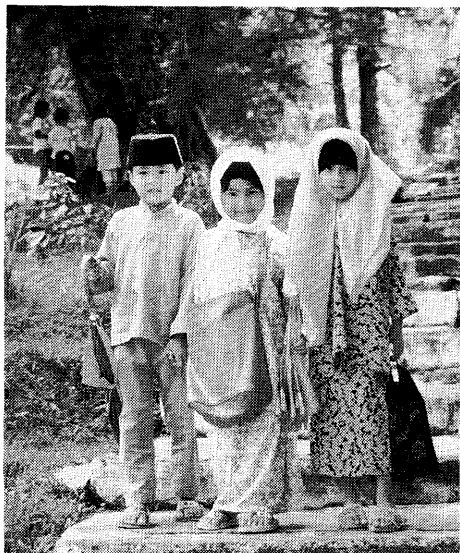
しかし、各種族グループにおける伝統的な衣装を着用する比率を比較すると、街で見ている限

りは圧倒的にマレー人が高いと言える。中国系、インド系住民でも前述した例を除くと大半の日常着は、日本の夏のカジュアルな服装とあまり違いが見受けられない。すなわち、男性は、上半身にはYシャツ、スポーツシャツ、Tシャツを、その下にはストラックスやジーンズという姿である。もつとも、最大の違いは、庶民は日本のようにネクタイを日常的にはつけないことではあるが。他方女性たちは、スーツやワンピースの他は、男性と同じように、スポーツシャツ、Tシャツにジーンズ、パンツルックというところであろうか。

ところで、マレーシアにおいて「マレー人」であることは、ムスリム（イスラム教徒）であることを意味する。したがってマレー人女性の服装はコーランの一節「外部に出ていゝる部分はないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう、胸には蔽いをかぶせるよう。」（第二章三節―井筒俊彦訳『コーラン』）にしたがうことになる。まず写真を見てもらうことが理解しやすいであろう。写真の右二人がマレーシアのムスリム女性の衣装である。写真は子供であるが、大人も同じ様式である。顔と手の先を除けば、頭くぶの先からくるぶし踝くるぶしの先まですっぽりと布で包まれている。頭部にはミニ・トゥルコン (Mini Telukung) を被り、上半身にバジュ・クロン (Baju Kurung) を、その下にはカイン・サロン (Kain Sarung) をまといつゝいる。

バジュ・クロンと ミニ・トゥルコン

バジュ・クロンは別名バジュ・ジョホール (Baju Johor) とも呼ばれ、後述する男性のバジュ・ムラユとともにその起源を十九世紀ジョホールにさかのぼるといわれる。この他の地方に起源をもつ日常着もまた存在する。



コーランの教えにしたがって…
(マレー人の子供たち)

例えば、バジュ・クダ (Baju Kedah)、バジュ・パハン (Baju Pahang) などである。しかし、現在マレーシア半島の西側の諸州で日常的に見られるのは、このバジュ・クロンである。この他に主たるものとしてバジュ・クバヤ (Baju Kebaya) がある。これは身体を中心に沿って、三つのボタンをもつ前開け式の上半身用の衣装である。

バジュ・クロンの伝統的な様式は、無地の布地を用い、襟元の正面には装飾したボタンを一つだけつけ、その長さは膝下までとすると言われる。サロンも伝統的にはバジュ・クロンと同じ布を用いて、スカート状にした服である。その長さは踝までとされている。サロンの一番の特徴は、布地の端を寄せ、波状のひだを数本作ることにある。これは原則的に向かって右側に位置することとされる。

他方、頭部をミニ・トゥルコンで覆う。トゥルコンとはムスリムの女性が「礼拝(日に五回行われる祈り(サラート))、マレ

「語ではスンバヤン（Sembahyang）と呼ぶ）」をするときに着用が義務づけられている衣装を指す。これは頭からすっぽり被り、からだ全体を覆う白色衣装である。このトゥルコンの「小規模な物」という意味で、ミニ・トゥルコンと呼ばれる。したがって原則的にはトゥルコンと同じように白の無地の布地が使われる。これは、正方形の布地を外側に相対的に布地が多くなるように三角形にまず折り、その三角形の底辺が顔の輪郭の線に沿うように被る。そして頸の位置から下の部分の内側の三角形の布地を縫い、顔の部分が固定できるようにされている。通常は顔の部分が出来るように縫製された既製品が街で売られている。この他に大型のスカーフを同じように被る人、またスレンダン（Selendang）と呼ばれる長方形の長い布を頭にゆったりと巻く人もいる。

これらミニ・トゥルコン、バジュ・クロン、カイン・サロン三点の衣類が、マレー人女性の外出時における日常着となる。したがって「着る」というよりもまさしく「身にまとう、身を覆い隠す」という言葉が適切であろう。「日常着」と書いたが、これらの衣装は同時に「晴れ着」ともなる。結婚式やそのほかの儀式などにも色彩、装飾品の差はかなり出るもの、これらの衣装が「正装」として扱われる。

もちろん現在、マレー人女性がこの三点セットを固定的なものとして身につけているわけではない。特にクアラランプルなどの都市部では、Tシャツにジーンズのみという若い女性によくお目にかかる。またTシャツ、ジーンズにミニ・トゥルコンだけをつけたり、ミニ・トゥルコンはなくバジュ・クロンとサロンだけ、とさまざまに組み合わせを変えて着ている。

ところでバジュ・クロンの“Baju”とはマレー語で「衣類、服」を意味する。一方、“Korung”は「刑務所、籠、かっこ」などを意味し、そこから「刑務所に入れる、籠に閉じこめる」など動詞を派生させる。いってみれば暗い響きをもった言葉といえよう。しかし、実際にこれらの衣装を身にまとい、高いハイヒールを履いて長い裾が流れるようにして歩いている彼女たちを見かけると、この意味から連想するような暗いイメージはなく、逆に華やかにさえ見える。そして彼女たちがこのバジュ・クロンを中心とした日常着を楽しんでいるように見える。その一つの理由に、これらの衣装の適応性がありそうだ。

伝統的な様式と着方が今も守られる一方でバジュ・クロンにも流行やファッション性もあり、また各個人が工夫を凝らして着ていることがわかる。

例えば、着方の変化を見ると、バジュ・クロンの長さは伝統的に膝下とされてきたが、最近の若い女性たちはどちらかと言えば長めを好み、膝と踝の中間にするのが流行だという。こうすることによってより身体全体に流れる優雅な印象が与えられる。またミニ・トゥルコンの巻き方についても同じように変化が見られる。基本は、写真の右側の子供のように付けるが、真ん中の子供のように裾を左右に後ろ側に回したり、近年は内側の布地を上手に紐状にしてカチューシャのように使うのが流行している。

また生地そのものにも変化がある。現在バジュ・クロンの布地は青、赤、黄色などはっきりした色目を中心に、花模様、幾何学的な模様などの模様地も多い。時にはビーズを使った花模様な

どが胸元を中心に施されていたりする。サロンについても波模様工夫が施されていたり、正面の布地をやや斜めに裁断してよりモダンなデザインにしていたりする。

こうした工夫でもっとも目を引くのは、この三つのアイテムの色の組み合わせであろう。各人が見事と思わせるほど巧みに組み合わせられている。例えば、通常はバジュ・クロンとサロンは共布で作られるが、バジュ・クロンのみ模様地の布にし、サロンは同系色の無地布を組み合わせた、二つのコントラストを際立たせるように選色したりしている。さらにここにミニ・トゥルコンの色が加わるのだから、この三つのアイテムの色のコーディネートがまさしく彼女たちの見せどころといったところだろうか。

マレーシアの

男性と日常着

一方、女性たちをバジュ・クロンに「閉じこめている」側の日常着はどうであろうか。都市部におけるマレー人の男性の日常着は女性に比して特徴が見られなくなってきた。写真の男の子の服は通常「バジュ・ムラユ」(Baju Melayu)と呼ばれ、女性のバジュ・クロンと対をなす服装である。これは断食明け(ハリラヤ・プアサ)などの祝日、結婚式などの儀式的時に主に着用する。しかし、金曜日のお祈り、また日々のスンバヤンの時にもこの服にいったん着替えたり、この子どものようにイスラム教育学校へ通学する時に着用することが多いことを考えると、ある意味で「日常着」の一部を構成しているといえる。

マレー人男性の日常着の特徴といえば、「バテック」(Batik)と呼ばれる布で作った服(バジ

ユ・バテック)となる。これは日本のろうけつ染めと同じ製法による布で作る。この布を使って Y シャツ状に仕立て(ただし裾は Y シャツのように燕尾状ではなく直線に裁断する)、裾はズボンの外側に出して着る。この服も日常着兼晴れ着である。公的な場に招待された時などは、これを着用すれば良い。この簡便さから、現在はマレー人男性のみならずマレーシア男性の日常着へと広がっているといえる。

さて、都市部でマレー人男性の日常着に特徴を見つけようとすると、自ずと目線は上へ向かう。インド系住民がターバン(マレー語ではスルバン〈Serban〉と呼ぶ)を巻くのに対し、マレー人がクタヤップ(Ketayap)と呼ばれる白い半球形の帽子(地方によりコピア〈Kopiah〉、またソンコック・ハジ〈Songkok Haji〉とも呼ぶ)や、クタヤップの上に同じ色のスルバンを巻いた人によく出会う。またメッカ巡礼を済ませた「ハジ」の称号を持つ人は日常的に白いクタヤップを被っている。帽子もまたマレーシアでは日常着の一部をなしているといえる。

これまで日常「屋外」着にのみ触れたが、「屋内」日常着について簡述しておこう。屋内では、往々にして男性は、T シャツやバジュー・ムラユとともにカイン・プレカットと呼ばれる衣装を下半身にまとう。これは、約一メートル強の丈の布(主としてバテック)を単に筒状に縫い合わせただけである。この筒の中に身体をお腹の上まですっぽり包み込み、布地を身体を中心でいったん押さえ、左右にできた布のたるみを左右それぞれ中心に寄せ、上から何重にも折り込むようにして止める。女性もまた、バジュー・クロンまたはバジュー・クダとともにカイン・プレカットと同

じような衣装で、カイン・パテックと呼ばれる衣装をまとう。

一見すると動きにくそうだが、このカイン・プレカットはムスリムの生活に極めて適していることがわかる。ムスリムは、スンバヤンの前に顔・手・足などを洗う（ウドゥ（Wudu））ことが義務づけられている。その際には裾を少しまくりあげるだけで洗えるからである。

マレーシアの 社会変化と日常着

バジュ・クロンなどの伝統的な服が形を変え、また場合によってはファッショニ性を加味しながら、現在も生き続けている。バジュ・クロンは小学校、中学校の制服にも採用されている。マレー人の女生徒たちは白い無地の布によるバジュ・クロンを身につけ、小学生（七歳から六年間）は濃紺のサロン状のスカートを、中学生（通常五年間）はライト・ブルーのそれを着用することが義務づけられている。ミニ・トゥルコンは主に白い無地の布地で作られるが、その着用は本人や両親の判断に委ねられている。しかし、多くの生徒が着用している。

新しい生活様式や工業化の波の中にもこの伝統的な衣装は息づいている。例えば工場の生産ラインを覗くと、いわゆる作業服の上にミニ・トゥルコンを付けた若い女子工員が電子製品などを組み立てている。また近年急速な勢いで拡大しているハンバーガーなどのファースト・フード店では、われわれが日本で見慣れた制服の上にミニ・トゥルコンを被り、さらに店で指定されたサンバイザー状の帽子を被っている。一見すると帽子を二重に被っているようなもので、奇異に感じるが、見慣れれば何のことはない。これがマレーシアなんだと思えてくるから不思議である。

イスラム原理主義
運動と日常着

このように、イスラムの教えに基づいた様式がファッション性や個人の趣味を取り込み変化する社会に息づく一方で、より原理的な考えに基づく生活を主張する人々、イスラム原理主義グループ、別名ダツワ・グループ

(ダツワ (Dakwah) とはアラビア語で救済、伝導活動を意味する) がマレーシアにも複数存在する。その一つである政党、マレーシア・イスラム政党 (PAS) は一九九〇年の総選挙で北部のクランタン州の州政権を奪取して以降、州内でイスラムの原理に基づく社会形成、すなわちイスラミックゼーションを政策として進めている。例えば州内でイスラム教育学校の増設、ムスリム女性の夜間就労の禁止、アルコール類の一部販売禁止 (一九九二年七月より) などである。この政策の一環として、九二年一月よりイスラム・ドレス・コードが施行された。このガイドラインによれば、州内のムスリム女性はコーランとハーデイスの教えに基づき、父親、夫、兄弟以外の男性の前では顔と手以外はすべて布地で覆うこととされている。具体的には、ミニ・トゥルコンもしくはプルダ (Purdah) と呼ばれるチャドル形式の衣装などの着用を義務づけている。このコードには罰則規定など法的強制力はないものの、このコードに従わない商店、スーパー、工場、オフィスなどに対しては操業許可の見直しや、操業申請時に遵守を義務づけているとされている。実際に、コード施行後の州都コタバルの商店街はミニ・トゥルコン一色となった。あるチェーン系のスーパーでは、この支店にのみコードに従った制服を支給して対応している。このクランタン州の例は政策による場合であるが、都市部では自らの主張として、黒いプルダ

を被った女性や別の原理主義グループの一つであるアルカム (Al Arqam) のメンバーがシンボルカラーの緑色のスルバンとクタヤップ、さらにジュバ (Jubah) と呼ばれる裾までつながった長い服を身につけている姿をよく目にする。

こうした原理主義グループの多くは、一九六九年の五・一三事件を一つの契機として七〇年代初めから八〇年代初めにかけて都市部で勃興し、八〇年代を通じて、都市部から農村部へと浸透しつつあり、特殊「都市的なもの」としては片づけられないものとなっている。

こうした原理主義グループの活動の活発化はその対抗措置として、政府による原理主義的な運動を引き起こすことになる。つまり、政府がイスラムの原理にいかん忠実であるかを指し示す必要が出てくる。つい先頃（一九九二年六月）も、政府機関の一つが制服の導入を始めた。この導入は「公的セクターの効率化政策の一環」と説明されたものの、その制服がミニ・トゥルコン、バジュ・クロンの着用を義務づけていることを見ると政府の真の意図を感じざるを得ない。

〔参考文献〕

(1) 井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫、一九五七年。

(2) Zakiah Hanum, *Tradisi dan Budaya* (伝統と文化), Singapore, Times Books International, 1987.

(とりい たかし/アジア経済研究所在バンギ海外派遣員)